

物質の地理学とポストコロニアリズム

シェリル・マツイワン*
(森 正人 **訳)

Material Geographies and Postcolonialism
Cheryl McEwan
Singapore Journal of Tropical Geography, 24(3), 2003, 340-355

要約

ポストコロニアル・スタディーズは、新たなアイデア、つまり人文地理学における教示と研究の幅広い領野にまたがる新たな言語と新たな理論的変奏を引き起こしてきたが、ポストコロニアル地理学を構成しうるものに関する持続的な議論はほとんどなされなかった。本稿は物質の地理学とポストコロニアリズムの可能性を探ることで、この不在に取り組もうとしている。テクスト的、文化的そして/あるいは歴史的のままだというポストコロニアリズム批判への応答として、地理学者は、ポストコロニアリズムとグローバルな不平等の物質的な現実性との間の生産的な関与、そして活気づく政治的・倫理的プロジェクトへの貢献者として、とくによく位置づけられることを提示する。ここでは、ポストコロニアルな方法論が特定の戦術によって地理学で活気づけられること、そしてポストコロニアルな政治的慣習に見えるものに暫定的な提示をもたらしうることを探求する。

キーワード: ポストコロニアリズム, 言説, 物質性, グローバルエコノミー, 政治学, 審美性

イントロダクション

ポストコロニアル・スタディーズは本質的に地理的であり、増大しつつある地理的教示と研究の領野は広範なポストコロニアル的枠組みの中に位置づけられる。地理学とポストコロニアリズムの交わりは、植民地的・新植民地的言説の空間性と表象の空間的政治の探求のための挑戦的な機会を提供する。地理学は帝國的ヨーロッパの支配的な言説の一つであり、そうした言説に対してポストコロニアリズムは、世界が知られる方法を揺さぶり、問題にし、他者の文化の意味、価値、実践に対して強烈であろう認識されず調べられることもない中心にある想定に挑む

(Spivak, 1990)。ポストコロニアル的なアプローチは、「他者」の世界は「あちら」とか「あの向こう」にあるのではなく「この中」にあり (Chambers, 1996:209)、それは西洋では「モダニティ」やら「進歩」として言及されるものに不可欠であると主張することで、地理学で援用される空間的隠喩と時間制へのはっきりとした批判を喚起している。ポストコロニアル理論は、その構成の場所によって同時に状況付けられる一方 (Clayton, 2000; Lester, 2003)、知識の位置づけと、とくに帝國的なヨーロッパで生産された普遍的知識 (Said, 1993; 199) を暴き出す。

ポストコロニアリズムはそれゆえに、植民地主義的かつ新帝国主義的権力と知識の地理的に伝播した

* Durham 大学

** 三重大学

論争であり、地理学はポストコロニアル批評の中心に横たわっているはずである (McClintock, 1995; Jacobs, 1996; Loomba, 1998)。おそらく驚くべきことではないが、英語圏/ヨーロッパ中心的な地理学者によるもっとも力ある批評のいくつかは、こうした目的に寄与する新たな研究所やジャーナルをめぐって基礎付けられた増大する知的興隆に刺激されながら、生産されている¹⁾。しかし、地理学者がポストコロニアリズムに対して、理論的かつ実質的な批判的取り組みを展開し始めたのはここ数年である。

近年のポストコロニアル的枠組みに位置づけられる地理的研究の急増にもかかわらず、ポストコロニアル地理学を構成しうるものに対する持続的な議論は相対的にほとんどない (Blunt and Wills, 2000; Blunt and McEwan, 2002a; Clayton, 2002; Nash, 2002)。同時に、言説と表象の批評と、ポストコロニアル的状况の生きられた経験やその明らかな無能さ (緊急かつ明確な解決を必要とする物質的問題を解決するための特別な政治的かつ倫理的目論見を定立することに関する) との結合の疑わしい失敗を含めて、いくつもの新たなポストコロニアリズム批評が存在してきた。ここで私は、地理学者が、ポストコロニアリズムとグローバルな不平等の物質的現実との間の生産的な関与へ、そして再活性化された政治的・倫理的企図へと貢献することによって、こうした批評への応答として十分に位置づけられることを議論したい。

これらの諸問題をめぐる思考を開始するにあたり、本稿はポストコロニアリズムの主要な批評を簡単になぞる。つまりそれは、政治的・倫理的責任を妨げる歴史的・理論的・文化的関心にとりわけ照準する。わたしは、こうした批評がおそらく誇張される一方、地理学は「再物質化」したポストコロニアリズムの種別的な要求に返答し、またポストコロニアル的状况の生きられた経験を批判的に探求するために、正しく位置づけられると考えている。わたしは、言説的/テキストの戦略と、ポストコロニアル理論に不在だと言われているマクロな問題 (グローバリゼーション、トランスナショナルリズム、貧困) に対するポストコロニアリズムの洞察の可能性でもって、特定の戦術がポストコロニアルな方法論を提供することも探求する。最後に、わたしはポストコロニアル地

理学が、より広範なポストコロニアリズムの批評によって立ち上がる倫理的・政治的熟考に貢献しうることを、そしてポストコロニアル的政治的慣習のように見えるものに対する一時的な提案をなしうることを考える。

ポストコロニアリズムの貧困？

ポストコロニアル理論の批評は今や何度もくり返されているが、それらは地理がポストコロニアル分析にもたらしうるもの、ポストコロニアル地理が生産的に取り得る将来の方向性について思いをはせることによって利用できるのだ。ポストコロニアリズムを含む文化的・テキスト的アプローチは、別の分析カテゴリーとして文化的なものを過大評価する傾向があると批判されてきた (Marcus, 2000)。Philo (2000) の「文化論的転回」に対する内省は、生きられた経験がアイデンティティポリティクス、言説、テキスト、記号、象徴、想像への過度の専心のために事実上無視されてきたことを詳述する。Philo の関心は、文化的なるものの過度の特権化による「脱社会化」「脱物質化」「脱政治化」された地理の増殖と考えるものへの増大する違和感の間で共感と呼んでいる (Gregson, 1993; Barnett, 1998a; Castree, 1999; Sayer, 2001; Stoper, 2001)。同じく、ポストコロニアル地理学は、ポストコロニアリティの物質性と日常的な経験を犠牲にして、歴史的、文化的、理論的、言説的事柄に専心するとして批判されている。

過去と文化的なるものを特権化する？

ポストコロニアリズムと地理学の間の変り方は、明らかに歴史的である。地理学と帝国の関係は、ポストコロニアリズムの諸問題が地理学において検証されることを可能にしたが、過去への批判的な回帰は、主に西洋の文脈の中で、そしてヨーロッパ的権力によって以前植民地化されていた地域に対して再び注意を払う傾向にある。この研究のほとんどは、とくに権力と知識の関係を解明し、帝国主義と新帝

国主義によって抑圧されていた人間の歴史的な作用を明らかにするためにとても重要である。しかし、この注意は、ポストコロニアリズムと同様に、ポストコロニアル地理学が歴史に魅了される傾向があるとか、それがポストコロニアル的の未来について多く語りすぎる失敗を犯しているとの批判に重みを与えている。

近年の修復と認識に対する主張と、ラディカルな歴史修正主義的と結びつきながら、この批判はある程度は、新たな光の中で現在を位置づけるために植民地的過去を用いる近年の研究によって反論される(Jacobs, 1996; Clayton, 2000; Harris, 2002を参照)。Gandhi (1998: 7) が議論するように、ポストコロニアリズムはポストコロニアル的状况における「ギャップと裂け目」に対応する改良的かつ療法的な企てにおいて、過去に「必然的に回帰する」(Chatterjee, 1997も参照)。私はここでポストコロニアル地理学が過去を二の次にするに違いないと議論しようとしているわけではない。そうではなくて、過去と現在の関係は決して十分には明らかにされてこなかった。むしろ、過去を満たし現在を形成することに對する批判的観点において、西洋の都市空間でかならずしも始まって終焉をむかえるわけではない幅広い文脈の領域に、ポストコロニアル地理学の推進力は置かれるべきである。

地理学的研究から離れ、グローバリゼーションと開発へのポストコロニアル的アプローチを調べてみれば(Corbridge, 1993; Crush, 1995; 概述としてMcEwan, 2002を参照)、ポストコロニアリズムと地理学の交差は文化的問題をめぐって展開してきた。地点、モビリティ、境界線、亡命といった空間的イメージは山積みだが、過去と現在の物質の地理学はよりしばしば見落とされてきた。それゆえポストコロニアル地理学は、より広範囲なポストコロニアル的アプローチにねらいを定めてきたのと同じような批判にさらされる。現実主義者は、人権と周縁化された人びとの自由の問題を無視しているとポストコロニアルを告発する。表象、テキスト、想像への関心は、貧困にあえぐ何百万もの人びとの生きられた経験の緊急事態から離れたものと理解される(Jackson, 1997)。政治経済学の普遍的前提を退けることで、ポストコロニアル的アプローチは植民地

主義的権力関係が存続する物質的方法を無視していると告発される(Ahmad, 1992; Dirlik, 1994)。Jacobs (1996:158) が記すように、ポストコロニアル理論の理論的抽象化はつねに日常生活の種別的・具体的・局所的状況ときちんと結びつくわけではなく、また簡単に直接的に政治に読み替えられることもない。この物質的事柄と政治的戦略への明確な無視は、生きるか死ぬかの緊急を要する問題の無視を告発することで(San Juan, 1998)、そして西洋の理論化と世界的に貧困にあえぐ人びとの実践的なニーズの間の基礎的な分裂を固めているとを告発することで、ポストコロニアリズムのもっとも激しい批判を生じさせてきた。

ポストコロニアリズムが過度に言説に根付いているという議論は、根拠があるのだろうが、もちろん、言説それ自体が物質的であるという事実を無視してもいる。実際、地理学は帝國的・ポストコロニアル的都市空間の秩序から、旅や移民の物質性、形象化やアイデンティティや文化の政治学や調停の問題にまでわたる例でもって、これを示してきた(Blunt & McEwan, 2002b)。同じようにポストコロニアリズムとフェミニズムの交差は、地理学にいくばくか影響を与え、女性たちが「正常性」を放棄すると同時に経済的権利拡大に奮闘すること、あるいは疎外された主体となる一方で市民権獲得の難問に直面していることなど、あらゆる女性に関係する生きられた経験を言説が伝えることを示してきた(Qayson, 2000)。これは、グローバルな不平等によってもっとも周縁化されている女性と結びついている。たとえば、Spivak (1985;1999) は、それのために、それについて、それに対して語られる「他者」としての女性の沈黙と、グローバル経済における周辺化されたそのポジションの結びつきを描き出した。ポストコロニアル的フェミニズムは、効果的変化のための可能性の創造において、言説的なものと物質的なものの結びつきを探索する中で重要な貢献をしている(Rose, 1987; Rajan, 1993)。明らかに、テキストの分析を限定するだけで十分なのでなく、世界と言語を秩序付ける権力の諸関係と世界を表象する想像の結びつきが存在する。ポストコロニアル地理学にとっての挑戦は、「概念的精巧さと実質的な詳細を結びつけること」(Philo, 2000: 27) と、同時に、物

質的なものと非物質的なもの、文化的なものとは政治的なものを扱うことの潜在性に対処することである。

グローバル資本主義と階級

ポストコロニアル理論それ自身は、グローバルな不平等への批判的反対の中に必然的に位置づけられる。それゆえ、おそらくそのもっともしつこい批判が、ポストコロニアリズムとグローバルな資本主義の間の関係や緊張関係を考えていないということは、皮肉である (Dirlik, 1994; Eagleton, 1994; Hall, 1996)。Party (2002: 78) は次のように述べる。

ポストコロニアル的批評における制裁的な閉塞は、コロニアリズムと後期帝国主義についての思考の衰退的損失である。これらの省略が反映するこの政治学と経済学の棄却は恥ずべきことである。

認識の政治学が持つより文化的問題に関しては、ポストコロニアル的アプローチはラディカルかつ前衛的に見えるだろうが、ポリティカル・エコノミーの視角やあまり前衛的に見えない分配の政治学からすれば、「それらは経済システムに取り組む方法をほとんど提示しない」(Sayer, 2001: 688)。

ポストコロニアル的分析におけるアイデンティティの政治学の重視にとまらぬ相対的な階級の無視は、独立後の政治的編成における対立する階級利害と、新たな土着的支配階級によって生み出される国際的連携の両方に関して、潜在的に深刻な省略だと批判される。さらにマルクス主義を離れても、Fanon から Spivak にいたるまで、ポストコロニアリズムが生産してきた最高の観念のいくつかは、より貧困となるだろう。Parry (2002) は、Ahmad, Dirlik, San Juan のようなマルクス主義的批評家が実際に到達するのが、ポストコロニアルとマルクス主義の伝統とのより綿密な連携であると言う。確かに、Said や Chakrabarty のようなポストコロニアル理論家は、原生的であり、言説的、物質的事がらに調和するポストコロニアル批評につねに賛意を示してきた。二人は必ずしも、ポストコロニアリズムのいく人かの批評家たちが提示してきたことに反対するとみなさ

れるべきではない。

これにもかかわらず、いくつかの例外はあるものの (例えば Esteva, 1987; Escobar, 1992; 1995 によるポスト開発に関する研究)、ポストコロニアリズムはその場で行動に簡単に読み替えられはしなかったし、その対立的なスタンスはグローバルな権力の不均等と不平等に影響を与えることもなかった。しかしながら Rattansi (1997: 497) は

ポストコロニアル研究が従事してきたことは、関係的なグローバルな資本主義の植民地主義の文化的政治学への非還元主義的方法の発見だが、グローバルな資本主義がポストコロニアル的研究で無視されてきたというのは、単に誤りである。

とする。多くのポストコロニアル研究は帝国主義、植民地主義、グローバルな資本主義との間の構成的関係を探求してきた (Chatterjee, 1986; Spivak, 1987; Said, 1993; Miyoshi, 1997)。階級関係は、しばしばはっきりと現れない一方、多くの研究においてそれらはほのめかされてきた。たとえば Spivak の研究の大半は、学問の微細な空間とグローバル経済/労働力の国際的分割の間の、そしてかつての植民地におけるジェンダーの言説的構築と女性の二重のサバルタンのポジションの間の結びつきの探求に関係してきた。

階級関係の不在はおそらく誇張されていることから、資本主義の批判に関する言説的アプローチの失敗もまた、ある程度誇張されている。Ashcroft (2001) の言うように、表象の中心性にもかかわらず、ポストコロニアル分析の重要性は、物質的実在や、経済的問題に直接関わるポストコロニアル的生活の生きられた経験の重要性への主張である。彼は、ポストコロニアル的变化のプロセスにおける物質的なものと言説的なものの結びつきを、そしてポリティカル/エコノミーと文化的アプローチが支配的秩序を批判するために相前後して働くことを示す共鳴しやすい実例として、カリブ海社会と文化に対する熱帯の砂糖の卓越の結果を例として用いる (Perrons, 1999)。同じように、Young (2001: 428) は、ポストコロニアル批評が文化的圏域において確立されたヨーロッパ中心的知識に挑戦する一方、グローバルな社会的正義を強化するラディカルな政治

的鋭さをさらに研ぎすますことで、反植民地主義的運動の精神の中でそれがひき続き働くことを強く検証している。つまり、その「権力・知識の政治学は」世界の多くの人びとの日常生活的経験として依然残る、正義、不平等、土地を持たないこと、搾取、貧困、病理、女性を「変える意思を強く主張する」。Yeoh (2001:462-63) が提示するように、ポストコロニアリズムとグローバルな資本主義の関係を問いたずことのリスクは、「両方の効果へのより批判的で同時的な関わりを要求する」(Hall, 1996; Slater, 1998)。

ポストコロニアリティとトランスナショナリズムを称賛する？

文化主義的アプローチは、ポストコロニアリティの時期尚早な促進とその不適切な称賛によって批判されている。Parry (2002: 74) は、ポリティカル・エコノミーの放棄は、帝国的プロジェクトがその最初から引き離されること、またそれが資本主義の軌跡から不可分であることを意味するとする。つまり、「グローバリゼーションは資本主義と離婚し、ポストコロニアリズムと結婚し、そして中心と周辺の間、そしてそのただ中での甚大な不平等にもかかわらず、トランスナショナルな文化的フローの促進は称賛されている」。Lomba and Kaul (1994:4) が論じるように「離散民」は「ポストコロニアリティの全ての経験と一線を画する」うえに、「『異種混淆』の主体・位置は定期的に修正主義的言明のための政治的・概念的空間としてのみ拡張させられる」(pp.13-14)。

とくにポストコロニアルの言説における移住者への特権付与は深刻な問題として考えられうる。Sharma (1996: 29) は次のように論じる。

現代のグローバルに人種化された資本主義の論理は、ローカル、ナショナル、トランスナショナルなレベルでの搾取的な社会的諸関係の新たな形式を(再)生産する。西洋学問の前衛的部門で見られる、周辺的文化の研究に向かう近年の転回は、この再編成された資本主義が持つ様式の抑圧的力学とぴったりかみ合ってしまうという失敗を犯している。……いかなる前衛的な政治的課題も欠く中で、異種混淆的な「エスニック」

文化を称賛するプロジェクトは、西洋的知的知識の認識的暴力を覆い隠し……「他者」の文化を本質主義的かつ「伝統的」固定へ還元し一進歩の「被害者」、観光の対象、移動の労働者、他文化主義の有色者として一、異種混淆性を自由な西洋との遭遇として維持安定させる。

この「他者」の文化の西洋との遭遇は、非西洋文化が解釈される中で粹組みとなる。異種混淆な民族文化は称賛されるが、これはさらに「伝統文化」を周縁化する。つまり植民地主義的遭遇は特権を持ち続け、文化資本のグローバルな支配は問題にされないままである。Parry (2002: 72) が論じるように、

おそらく不安定なディアスポラの経験的調査を促進するポストコロニアルの研究の 때가、また、ヨーロッパ、北アメリカ、湾岸の国々で契約労働者、臨時労働者、あるいは家事使用人として一時的で不当な雇用に取り残された、散在され、貧困化され、軽蔑された人びとによって語られた経験の散種を始める来ている。

海外のビジネスコミュニティの成功や、「民族的」産業の活気や、大衆文化のただ中で自分たちの空間を守るいくつかの移民集団の成功を探索するトランスナショナリズム研究は、世界中の移民労働者が直面する厳しい現実 (Lipsitz, 1997)、世界中の多くの他民族的経済が今もお低賃金、ひどい労働条件、人種主義によって特徴付けられる事実を理解することで釣り合いを取る必要がある。これから私は、まさに地理学者がすでにこの種の研究を引き受けることで、ポストコロニアリズムの批評に応答し始めていることを示そう。私はまた、物質の地理学とポストコロニアリズムの間のより批判的な取り組みを可能にしうる多くの戦術を提示したい。

ポストコロニアリズムを「再物質化」し「再政治化」する

地理学と地理学者は、Chakrabarty (1992; 2000) がヨーロッパの地方化、より広範な植民地的歴史における進歩の西洋的物語の移転、「本国」と「周縁」の間の相互関係がつくる複雑な網を探索することによる「中心」の再考として言及してきたものにおい

て、中心的な役割を果たす (Hall, 1996 も参照)。しかし、わたしはポストコロニアリズムが、特に地域研究にはびこる堅固な冷戦の物語を混乱させる必然的かつ難解なプロジェクトにおいても機能すると提案したい。近年の批評 (Miyoshi & Harrtunian, 2002) が示すように、地域研究はポストコロニアリズムに押しつけられた認識論的挑戦を受け入れ始めるという失敗をおかしてきた。とりわけ東アジアにおける、企業と外国政府からの献金は、研究者が資金を失わないように批判的なアプローチを控えるような圧力を与えている。だから、ポストコロニアル的アプローチの可能性はヨーロッパを地方化するだけでなく、地球規模で現れる冷戦の物語と世界のヨーロッパ中心的理解を揺さぶることができる。日本に焦点を当てれば、Miyoshi and Harrotunian (2002) は、再設定された地域研究が、文化間の流動化した相互交換によって特徴づけられる急激な世界の変化の理解に、どれほど劇的に役立っているのか示している。

ポストコロニアル地理学は言説的、物質的現実性を結びつけ、グローバルな不平等の批評と交差することへの必要性に応じており、それは活気づけられた政治的かつ倫理的なプロジェクトへの含意を持っている。たとえば、経済地理学におけるもっともエキサイティングな近年の研究のいくつかは、ポストコロニアリティの条件によって力を奪われた労働者—移民の地位、市民権の欠如、雇用の季節性と非公式性、言語と国籍に基づく断片化—が、組織をとおして自らの力を獲得する企てを探求している。こうしたグローバルな資本主義の周辺化された効果に対するサブアルタ的な抵抗の形式は、ポストコロニアル的分析に役立つ³⁾。幅広くポストコロニアル的な理論的枠組みの中で研究をすすめる何人かのフェミニスト地理学者は、ディアスポラ的な女性の集団が見せるトランスローカルかつトランスナショナルな地理と経験に関する研究を作り出しており (Pratt, 1999; yeoh & Willis, 1999; Blunt, forthcoming?), 「人種の政治学……の散らかり」 (Jackson & Jacobs, 1996: 3) とその物質的地理の探求に貢献している。こうした展開をもとに、今からポストコロニアル的实践、政治、倫理の可能性を考えよう。

ポストコロニアル的实践：癒すこと、語ること、書くことの戦術

Nash (2002:222) がポストコロニアリズムの議論で示すように、「地理的差異、相互結合、『進歩』の空間的想像力への批判的関心、『文明化』、『発展』もまた、植民地主義とその遺産の物質的地理を前景化する」。地理学者は、局所化された抵抗や再流用を明らかにしうるローカルスケールの分析を理解しているので、とりわけ言説的、テクスト的戦略を物質的問題と結びつけることができる。歴史的エージェント性を明らかにする性質に対して文書を読んだり (Barnett, 1998b; McEwan, 1998)、権力のヘゲモニックな関係性によって沈黙させられた他の人びとの生きられた経験を暴き出す抵抗的な記述の別の形態を分析するというように、それらは抵抗の声を聞くことをとおして戦術を展開できる。これらは貧困によって周辺化された人びとによる自伝や証言を含み、個人的な生が近代性の帝国のエコノミーとして先導される資本のグローバルな体系によって影響を受けていることを示すために、ポストコロニアル的分析に豊かな場を提供する (Barrios de Chungara, 1978)。ポストコロニアル的な読解の戦術は貧しい人たちのためにそしてそれとともに作用しうるため、「形式の法則はもはや」世界の別の場所から来た人びとの「表象や発現を支配しないだろう」 (Kaplan, 1998: 215)。それらは「地域的なあるいは局所化された世界観を生産するために、そして一植民地主義と新・自由主義によってローカルな空間の一つを空っぽにすることで—それゆえにモダニティのもっとも広範囲な効果の一つを崩壊させるために、場所を再・書き込みするという目的のもと」 (Ashcroft, 2001: 30-31) 支配的な言語の流用を可能にする。

周辺化された人びとは、ほとんど出版のグローバル経済の中で声を上げることができない。だから、テクスト的生産をとおして抵抗の声の節合をするための空間を作り出すために、研究者がなし得る役割は重要である。芸術家であり研究者でもある Shelley Sacks の社会的彫刻に関する研究は、この点で着想的である。彼女の展示会「交換価値 Exchange Values」(つぎはぎされたひからびたパナナの皮、それを育てたウィンドワード諸島の農民たちによる口

頭の証言の展示)の重要性は、地理学者たちによって検討されている (Cook et al., 2000)。それはアートを、主として商品の鎖 commodity chain の末端に生き、その労働は不可視なままの声なき人びとと(この場合はカリブ海地域の人々)、対極にいる消費者とを、生産物それ自体(バナナ)を使って結びつけるために用いる。これは、商品の鎖の両方の末端の人びとに権利を与える可能性を保持しながらの、「自由貿易」の効果に対するラディカルな批評である。生産者たちは、消費者との関係をとおして、そしてそれによりグローバル経済の機能がしばしば緩和される結びつきを促進することをとおして声が与えられる。消費者は、自分の選択がどこか別の場所の人びとの生活と直接に関係していることを自覚していない可能性を持つ。このプロジェクトは、中核と周辺の間、かつての帝国主義の本国と植民地主義的宗主国の間の境界を取り壊すことで、別の場所とそこで生きる人びととを結びつけるためのアートと言説と物質性を混ぜ合わせる。境界を取り壊し、結びつきと別のものを想像し、参加と権限付与を促進し以前声を持たなかった人びとにそれを与えることで、ときにポストコロニアリズムの濃密で分かりにくい理論は、方法論へと読みかえられうる。

これらの例は、ポストコロニアル化する言説を生産するための多くの方法論的手続きを用いることで、地理学がポストコロニアリズムの問題に返答しうることを提示している。Quayson (2000: 21) が論じるように、ポストコロニアル化は「ポストコロニアル的な解釈のプリズムをとおして、西洋やどこかにおける多様な文化的、政治的、社会的現実をとらえるための生産的な方法を提示する」ように意図されている。ときにこれは、現存する理論の緻密な分析、近代世界における特定の主体の位置を統治する条件に対する注意深い分析、文化的なるものや政治的なるものの総合的な読み、あるいは特定の社会問題を分析する支配的な様式を乗り越える想像的な方法の探求を巻き込む。こうして、「あらゆる種類の現実世界の知識や経験へのアピール」を阻止することを目論む「容易なテクスト論者的思考」(Norris, 1993: 182)として酷評される手続きは避けられうるし、象徴体系の政治学 (Parry, 2002: 67) は政治学の理論と実践を取り除くことはない。

ポストコロニアル地理学の政治学と倫理？

おおざっぱに言えば、ポストコロニアル的パースペクティブは、反植民地的と言われうる (Ashcroft et al., 1995; Radcliffe, 1999)。しかしポストコロニアリズムの政治学は、しばしば別のパースペクティブからはっきりと分岐するし、そのラディカルリズムは制度化された課題や慣習化されたものの見方を拒否する。別の場所におけるポストコロニアル的批判的課題は、コロニアリズムと反植民地的抵抗の別の性質、形式、タイミングによって、別の社会区分の団塊によって、そして新しい新植民地主義的支配とトランスナショナルな結びつきによって形作られる。Nash (2002: 227) が言うように、これらの差異は「別の場所での、特定の複雑で乱雑な社会的諸関係の物質によっては決して挑戦されることがない、一連の印象的な理論的ツールとなりつつあるポストコロニアリズムに反する働きをする」。それらはまた単一のポストコロニアル的政治や政治的戦略のポジショニングにも反対する。それゆえ、ポストコロニアリズムの「政治学」に関する問題が立ち上がるなかで、これらがつねに相異なる相互接続的な植民地的文脈と遺産のただ中に位置づけられると、私は示唆したい。

言説的なるものを物質的なるものに結びつけることは、政治的なるものが地理学におけるポストコロニアル的分析にとって重要でありうるものに関する思考を、必然的にともなう。それは、その反植民地的スタンスのために、政治的要請がその始まりからポストコロニアリズムを後押ししていたと議論されうる。しかし Quayson (2000) が言うように、現実世界への活動家による関与と、テクスト、イメージ、言説の分析をとおしてのより距離を置いた参画との間にも対立がある。ポストコロニアル的批評の名目—他者性の声の中で知識の西洋的パラダイムを語り、西洋的主体性の構成が主体化された他者との相互作用に依っていることを提示し、中心と周辺を不安定化させようという欲望 (Bhabha, 1994; Stoler, 1995; Ong, 1999) —は倫理的事業であり、その主張をポストモダニズムやポスト構造主義といった別の理論が行わないような方法で押しすすめることである。しかし、矛盾することに、ポストコロニアル的

政治学の観念はまた、ラディカルな倫理的見地をとるために、持続的な不本意によって問題化される。それゆえ、ポストコロニアル理論と批評は多くの批判を引きつける矛盾によって引き裂かれる。

ポストコロニアル的世界における社会的指示対象は緊急の明確な解決を要求するが、ポストモダニストの世界における発話のポジションは、信用できなくなった世界の一部であることによってつねにすでに内在的に汚されているので、ポストコロニアル的批評家はしばしば、主たる目的が言説のゆがみや環に永久に注目するようびよう留めすることにあるように思われるレトリックの、洗練された形式に最後の手段としてしばしば訴えている (Quayson, 2000:8)。

しかし Quayson and Goldberg (2002) が提示するように、それは不可能ではないが、その倫理的目的が達成されるための手段がなお論争的であるとしても、ポストコロニアル的解熱を倫理的プロジェクトから分けることは難しい。もちろん、何が話されようとも実存的なためらいを語ったり、示したりすることはそれでも可能だが (Katz, 1995; Storper, 2001)、責任あるポストコロニアリズムの究極的な対象は何でなければならぬかという問題は残されたままである。たとえば、発展の言語に関する推論的な分析を行いながら、構造的な調整の政策によって発展途上国で生産される、経済的かつ社会的分裂を記述しないとすれば、それは何だというのか。「われわれが不正義、支配、あるいはポストコロニアル的な地獄を経た道筋の暗示を集めることができる、現実的な抵抗のいかなる種別的なシナリオにも、われわれは一度も会ったことがない」 (San Juan, 1998:2) とすれば、権力を弱体化させる言説の使用とは何だろうか。すでに挙げた問題に立ち戻るために、学術的なポストコロニアル的研究は現代世界のポストコロニアリズムの経験に何を寄与するのだろうか。

これらの問題はなおもいくぶん修辭的だが、Spivak (1993) による、グローバルな分脈における研究者の役割の審問と、彼女の持続する政治的・知的グローバルな活動の類型は有効である。その多くの記述において、Spivak は損失としての特権をあえて忘れ去ることの重要性をほのめかす。教育機会と市民権とロケーションに関していえば、労働の国際的

分化においてほとんどの学術研究者が恩恵をこうむっている。それらが人種、階級、国籍、ジェンダーなどなどの何であろうと、特権は、単にわれわれがまだ享受していない情報であるだけでなく、われわれの社会的ポジションという理由でまだ理解できていない、ほかの知識へのわれわれの接近を妨げてきた。Spivak の、特権を「あえて忘れること」は、われわれの特権化した視点ともっとも近いその空間を占める他者の知識を獲得するために懸命に働くこと、そしてそれらの他者と彼ら彼女らがわれわれを真剣に受け止め回答しうる方法で語り合おうとすることをともなう。これは地方化する地理学とポストコロニアル化する慣習において特に重要である。

Spivak (1993) はまた、相互に学びあう仲間の容認としての倫理的な関係を仮定し、戦術を聞いたり書いたりすることを考えるための含意を持つ倫理の公式を強調する。この容認は、抑圧された人びとのために話そうとすることと同じではない。Spivak (1985) がサルタン (国際的な労働の区分、とりわけ「途上」国における女性労働の過剰な搾取によって抑圧される以前に植民地化された人びと) は語るができないと論じるとき、彼女は彼／彼女が「先進」国と「途上」国の両方で特権化された人びとによって耳を傾けられ得ないことを意味する。もしくは Jacobs (2001: 731) が言うように、「今や他者のために語らないポストコロニアル的政治学が、他者に耳を傾けることのもう一つのポストコロニアル的政治学を無効にすることはとてもよくあることである」。Gramsci の言葉を用いれば、後者は彼ら彼女らが自分たちのコミュニティのための有機的知識人もしくは代弁者となるときにのみ、サルタンであることをやめる。そうした変化は、抑圧される人びとを代理=表象しようとする、もしくは単にその人たちに語らせようというふりをする知識人によってもたらされるわけではない。しかし、本質的に異なる場所における学術研究者と非学術研究者の相互作用は、「新しい政治的アイデンティティとイニシアティブを可能にする」と同時に「もう一つの社会区分と社会实践の構成要素」となりうる、新しい言語と社会的代理=表象を生み出しうる (Gibson-Graham, 2002: 108)。特権化した学術研究者の資格が持つ不可避的な不公平の問題にもかかわらず、知

識の有効性の認識は「政治的プロジェクトと欲望を活気づける新しい主体的ポジションと想像の可能性を作り出すことで、言説を作り出し変形させることの活動としての研究に対する重要な役割を作り出す」(Graham, 2002: 105; see also 1994)。

ポストコロニアル的政治学にとってのさらなるジレンマは、ポストコロニアル理論がそれ自体をどこにでも位置づけ、どこにも位置づけられないように思われるという事実である。Quayson and Goldberg (2002) が指摘するように、それは広範囲な社会理論 (Lacan, Derrida, Foucault, Adorno, Deleuze and Guattari) から借用し、一見したところいかなる歴史的時期においても展開される(例えば、Cohen's (2000) *The Postcolonial Middle Ages*)。しかし地理学にとって、これは理論的かつ政治的に生産的でありうる。ポストコロニアルの問題と一見したところ関係を持たない多様な理論は、ポストコロニアリズムの新しい言説を生み出してきた。例えば、比較文化的フェミニスト政治学のような新しい思考方法における対立とジレンマは、文化の権力と経済の権力の関係の批判的検討に貢献し、政治的なものの基本的な再主張に向かう潜在性を持つポストコロニアル/フェミニズムを生産してきた。表象、ヘゲモニー、その他の諸問題に取り組むための類似した理論を利用する、ポストコロニアリズムとフェミニスト、ゲイ/レズビアン、倫理的研究と身体障害の研究の概念的提携は、たとえそれが大学の中やその外側の統合された政治的課題に効果を持つかどうかはつねに明らかではないとしても、地理学においてそしてそれを越えて特に生産的である。

これらの展開にもかかわらず、ここでの議論はポストコロニアリズムが地理学のまさに問題であること、そしてそれがなすべきことに関するものであることを主張する。ポストコロニアルの地理学の展開について考えたとき、まだ存在しない条件を認識し、しかしそれにもかかわらずそれを引き起こそうとする、生成の「倫理—政治学」(Ferguson, 1998)、「ポストコロニアル化のプロセス」(Quayson, 2000: 9)、「予想の言説」(Childs & Williams, 1997: 7)としてポストコロニアルを考えることはおそらく助けになる。ポストコロニアル地理学はローカルなるものの種別性に対する注意深い基礎を提供し、「変貌し

たより良き未来を視野に入れる」(Quayson & Goldberg, 2002: xiii) 多様な社会、文化、歴史、政治的文脈に諸現象を埋め込む可能性を持つ。ポストコロニアリズムは、ポストコロニアル的文脈に直接関係する出来事や現象を解釈するばかりでなく、「植民地的な余波の継承」(Gandhi, 1998: x)による多様な相互連関的なレベルで完全に形作られた世界を理解する方法として発展しうる。それゆえ、「ポストコロニアル化のプロセス」は、今日の現象をこの遺産との明示的かつ暗示的な関係と関連づける批判的なプロセスを参照するだろう。

これらの洞察を利用することで、われわれは「政治的」なるものが意味に満ちたポストコロニアル的な地理的知識に対して意味するものを、より注意深く考えることになろう。Ashcroft (2001: 19) は「ポストコロニアルの主体の現実の実践により十分に従事する理論……は、変容の詩学と政治学である」と論じる。一方で、変容の詩学は書き手と読み手が意味を構成的に助長する方法、以前に植民地化された社会が支配的な言説を流用する方法、それらがテキストの生産と流通の支配的な体系に彼らの声と彼らの関心を差し挟む方法に関心がある。変容は、権力が文化的な生活であることを認識し、新しい文化生産の形態を創造する中で、多様な権力を改作し再び方向付ける。他方、変容の政治学はそれらを変化させるために存在する多様で制度的な編成の中で、絶えず作用する。それ自体を記述し続けることをとおして、政治的言説もしくは政治的構造において、もしくは教育的言説や制度をにおいて、場所、人、そして経済の概念は変容させられる。「究極的に、変容の詩学と政治学は学問分野の変容に効果を与える」(Ashcroft, 2001: 19)。

ポストコロニアルの地理学はまた、ポストコロニアル性の複雑性に関するより再帰的な理解を提供しうる。「これを最後にポストコロニアリズムを整理する」(Nash, 2002: 228) してあらゆるものを含む理論的もしくは政治的枠組みを考案することよりも、むしろ、ポストコロニアル的なものの相異なる空間性に返答し、しかしつねに問題化することができる、一時的かつ継続的に吟味される地理学においてポストコロニアル的な政治学の観念を維持することの方がより生産的である。ここで明らかなのは、変

形させる力を持つポストコロニアル地理学に対する文化の継続的な中心性と、基礎をなす経済的、政治的、社会的抵抗が、言語、記述、その他の文化的生産において生じる表象に対する闘争であることの認識である。ポストコロニアル地理学の可能性は、帝國的権力の継続する現実性と主体的な人間とを正しく区別すること、グローバルな権力関係におけるネオ・コロニアルな主体の沈没に抵抗することにある。グローバリズムが、すべての人びとが消費者であるという土台の上で、人びとの差異を消し去る一方で、ポストコロニアリズムは、経済と同時に社会に属することをあらわにすることで、今もなお残された人びとの間の格差を明らかにし、また、社会が今もなお帝国主義によって確立された文化的ヘゲモニーによって支配されていることを明らかにするために作用する (Ashcroft, 2001)。表象の変容は、そうした実践がしばしば批判的な物質的含意を持つ物質的な世界に状況付けられているため、重要である。

この中心をなすのは場所に基づくことの重要性和、ポストコロニアリティのローカル/グローバルな陰謀の理解である。ポストコロニアリティの地理的ダイナミズムに関する批判的な省察はまた、現在の明確かつ首尾一貫した倫理的かつ政治的なポジションを歓迎する。ポストコロニアリズムが批判的調査の折衷主義的かつ暫定的な領域である一方、倫理的かつ政治的な要請は、学問的プロジェクトとしてのポストコロニアリティとポストコロニアリズムの正確な地理的理解を下支えする義務がある。これを心にとどめることで、われわれはコロニアリズムとポストコロニアリティにおける場所、ローカル、基礎付けられたもの、パフォーマンスの重要性への哲学的・歴史的指示対象を導きだすことになる。Chakrabarty (2002) のモダニティと植民地的過去における「居住すること」の観念を倫理-政治的原則に各上げること、より近年では Derrida (2000 ; 2001) と Spivak (2002) の歓待とコスモポリタニズムのジレンマに関する記述は、それらがトランスナショナリズムや、移民やアサイラム・シーカー [移民申請中で避難場所を探す人々の総称。イギリスにおいて近年、移民排斥の議論とともに社会問題化している：訳者注] の生きられた経験と関係するため有益である。これらの問題は地球的に重要であり、

とりわけ人びとのトランスナショナルな流れがますます深刻となっている東/南アジアの国々において重要である。われわれはまた、コロニアル的他者の局所的な愛着に対する帝国の反道徳的な無視や破壊 (例えば Mehta, 1999 を参照)、これが現代の地政学や地経済学を知らせることを検討するかも知れない。特定の局所でその土地の主権が表明され、生きられ、演じられる方法を検討することはまた、支配的な西洋文化や犠牲、悲劇、ノスタルジアのロマン主義的な表象の諸挙と対照的に、土着の人びとの行為主体性を前景化することも可能である (Vizenor, 2001)。

こうした関心は、政治的かつ倫理的に告げられたポストコロニアリティの理解が取るであろう外見に光を当てることで、批判的なポストコロニアル的地理学を示し始めている。Robinson によって位置づけられたポストコロニアル化する地理の政治的プロジェクトに対する戦術は、それらが「周辺」からの議論や実践に関与することを求め、知識の分裂した地理に対して作用するために、こうした関心に織り合わされている。

結論

本稿はポストコロニアリズムをめぐる主要な議論と批評を概述し、地理学がそれに応答し、その潜在的にラディカルな洞察と効果を加える方法を提示することを目的とした。第一に、物質的かつ言説的事項の間のより生産的な取り組みの可能性を探ることによって、第二に、これと関係して、ポストコロニアル的アプローチとグローバルな不平等とポストコロニアリティの多様な生きられた経験の間の相互関係性を発展させることによって、第三に、ポストコロニアル化する地理の政治的・倫理的の可能性を展開することによってこれは達成されると議論した。地理学における進歩の物語をめぐる警戒、とくに普遍化する進歩の発現を避けるための警戒にもかかわらず、いかなる種類の政治も進歩とは何かの観念を必要とする (Rorty, 1998)。たとえばアンチ・セクシズム、アンチ・レイシズムと同様に、われわれはポストコロニアルな地理学が意味に満ちているように

見えるものが、いったい何なのか問うことができるように、そして問い続けることができるようにしておかねばならない。

ポストコロニアル的アプローチは、西洋の知識が西洋的権力の発動と不可分であること (Said, 1978; Spivak, 1990; Young, 1991; 2001), そしてもう一つの経験や知識獲得方法の価値を重ねて主張する (Fanon, 1986; Ngugi, 1986; Spivak, 1987; Bhabha, 1994)。それらは、「西洋を越えた」土地と人々をめぐる帝国主義的代理=表象と言説、そして西洋の学問の制度的実践に関する困難な問題を分節化する。それらは、フェミニズムなどの政治的実践に多くの変化をもたらす他の批評と社会的楽観主義を共有する (Darby, 1997: 30)。不平等な諸関係の差異の政治学と行為主体だけえ変容させることは一見したところ不可能なのに対して、ポストコロニアリズムは、西洋の地理思想の多くのヨーロッパ中心主義や保守主義に対して、のどから手が出るほど求められる修正策なのである。しかし、ポストコロニアル的地理学はおそらく物質的熟考に取り組むことが求められており、Dirlik (1994: 356) は、

これらの無視はどんな抵抗の実践にとってもスタート地点となりうる認知地図化を不可能にし、それらの地図化は資本主義的世界経済を管理する人びとの支配にあるため地図化を置き去りにする。

と言う。もしグローバル経済の不平等とポストコロニアリティの生きられた経験が反植民地主義の政治的要請を掘り崩すなら、ポストコロニアル地理学の可能性は、ポストコロニアリティの相互結合性と複雑な空間性を精査し、対話と差異に適切な思慮を与える能力の中にあるのだ。

後者は、ポストコロニアリズムの中心的なパラドクスはそれが制度化されたものとなるという変化であるという、とりわけ重要な事実であり、それは以前に植民地化されその後も抑圧されているものの排除を永続化させる一方、現代の西洋のアカデミーの言語を話す晴洋に基礎付けられた知的エリートの関心を表象している (Ahmad, 1992; McClintock, 1992; Watts, 1995; Loomba, 1998)。もちろんポストコロニアリズムが新しい植民化の言説になり、それゆえにグローバルな権力の英語を話す世紀とは異

なる公式化や認識論に対するもう一つの主体となる特有の可能性は存在する。たとえば、ラテンアメリカのどれほど多くの批評家がポストコロニアリズムに思いを巡らしているか (Klor de Alva, 1992; see also Ashcroft, 2001)。しかし Ashcroft (2001: 24) が言うように、新しい覇権的な領域よりもむしろ、われわれは以前に植民地化された社会や人びとの政治的、言説的戦略について語る方法としてポストコロニアリズムをとらえるかもしれない。もう一度言うと、これについて、そしてグローバルな資本主義の反体制的な操作がとる多様な形態を注意深くとらえることで、地理学は理想的に位置づけられる。しかし、Spivak (1990) が言うように、権力、権威、ポジショナリティ、知識の関係に対するより一層の敏感さがなお求められる。自らの文化的環境の外側にある人びとについてポストコロニアル的な枠組みの中で記述する研究者のパラドクスは、それらが必然的に西洋的な学問制度のグローバルなヘゲモニー、換言すれば、生産、出版、流通、情報や思想の消費のグローバルな経済に対する西洋の支配の中に位置づけられることである。

謝辞 (省略)

注

- 1) まさにこの雑誌 [Singapore Journal of Tropical Geography のこと: 訳者注] は、この種の備論の多くの第一線の役割を果たしてきた (Driver & Yeoh, 2000 を参照)。いくつかの核心的なプロジェクトはまた、前進するアジアの大学中にある。たとえば、シンガポール国立大学の地理学デパートメントのチームは、文化・社会地理学が地域の中で教えられ、実践されること、地域は冷戦期の地域研究や発展の言説をとおして生産されてきたことを研究してきたし、東南アジアの地理学を理解するための新しい理論的枠組みを想像してきた (Tim Bunnell, personal communication, 2002)。明らかに、ポストコロニアル地理学は東南アジアからも記述されている (たとえば Kusno, 2000; Bishop et al., 2003 を参照のこと)。
- 2) これはポストコロニアル地理学 (表象的なものへの取り組みの中にその起源を持つ) が終焉を迎え、批判的な「発展の地理学」(グローバルな不平等に警鐘を鳴らす) が始まる地点に関する疑問を生じさせる。これはさらに

議論するだけの価値があるが、二つのものの関わり合いに欠かすことができないものがあるため、私は今は物質的实践と空間への関心が言説、テキスト、想像、対抗・想像はから引き離されるべきではないと論じる。

- 3) ラスベガスのホテル被雇用者とレストラン被雇用者 (HERE) の組合に関する研究 (Rothman & Davis, 1999) はとくに有益である (サンフランシスコのホテル産業における移民労働者の組合形成については, Sherman & Voss, 2000 も参照のこと)。以前は周辺化されていた労働者が, 国家的なアジェンダに位置づけられることを裏付ける, 多くの独立後の国家における組織形成の新たな形態が存在する。

参考文献

- Ahmad, A. (1992) *In Theory: Classes, Nations Literatures*, London: Verso.
- Ashcroft, B. (2001) *On Postcolonial Futures. Transformations of Colonial Culture*, London: Continuum.
- Bamett, C. (1998a) 'The cultural turn: Fashion or progress in human geography', *Antipode*, 30(4), 379-94.
- Bamett, C. (1998b) 'Impure and worldly geography. The Africanist discourse of the Royal Geographical Society', *Transactions, Institute of British Geographers*, 23(2), 239-52.
- Barrios de Chungara, D. (1978) Let Me Speak! (trans V. Ortiz), *Mexico City: Siglo 21*.
- Bhabha, H. (1994) *The Location of Culture*, London: Routledge.
- Bishop, R., Phillips, J. & Wei Y.W. (2003) *Postcolonial Urbanism*, London: Routledge.
- Blunt, A. (forthcoming), *Domicile and Diaspora: Anglo-Indian Women and the Spatial Politics of Home*, RGS-IBG Book Series, Oxford: Blackwell.
- Blunt, A. & McEwan, C. (eds.) (2002a) *Postcolonial Geographies*, London: Continuum.
- Blunt, A. & McEwan, C. (2002b) 'Introduction', *Postcolonial Geographies*, London: Continuum, 1-6.
- Blunt, A. & Wills, J. (2000) *Dissident Geographies. An Introduction to Radical Ideas and Practice*, Harlow: Prentice Hall.
- Castree, N. (1999) "'Out there"? "In here"? Domesticating critical geography', *Area* 31(3), 81-86.
- Chakrabarty, D. (1992) 'Postcoloniality and the artifice of history: Who speaks for Indian pasts?' *Representations*, 37, 1-24.
- Chakrabarty, D. (2000) *Provincialising Europe: Postcolonial Thought and Historical Difference*, Oxford: Princeton University Press.
- Chakrabarty, D. (2002) *Essays in the Wake of Subaltern Studies*, Chicago: University of Chicago Press.
- Chambers, I. (1996) 'Waiting on the end of the world?', in D. Morley & K.H. Chen (eds.), *Stuart Hall, Critical Dialogues in Cultural Studies*. London: Routledge, 201-11.
- Chatterjee, P. (1986) *Nationalism as a Problem in the History of Ideas*, London: Zed.
- Chatterjee, P. (1997) *A Possible India: Essay in Political Criticism*, Delhi: Oxford University Press.
- Childs, P. & Williams, P. (1997) *An Introductory Guide to Postcolonial Theory*, New York: Prentice Hall.
- Clayton, D. (2000) *Islands of Truth: The Imperial Fashioning of Vancouver Island*, Vancouver: University of British Columbia Press.
- Clayton, D. (2002) 'Critical imperial and colonial geographies', in K. Anderson, M. Domosh, S. Pile and N. Thrift (eds.) *Handbook of Cultural Geography*, London: Sage, 354-68.
- Cohen, J.J. (ed.) (2000) *The Postcolonial Middle Ages*, Basingstoke: Macmillan.
- Cook, I., Crouch, D., Kaylor, S. & Ryan, J. (2000) 'Social sculpture and connective aesthetics: Shelley Sacks's "Exchange Values"', *Ecumene*, 7(3), 337-43.
- Corbridge, S. (1993) 'Colonialism, post-colonialism and the political geography of the Third World', in P.J. Taylor (ed.), *Political Geography of the Twentieth Century*, London: Belhaven Press.
- Crush, J. (ed.) (1995) *Power of Development*, London: Routledge.
- Darby, P. (ed.) (1997) *At the Edge of International Relations. Postcolonialism, Gender and Dependency*, London: Pinter.
- Derrida, J. (2000) *Of Hospitality*, Stanford, Stanford University Press.
- Derrida, J. (2001) *On Cosmopolitanism and Forgiveness*, London: Routledge.
- Dirlik, A. (1994) 'The postcolonial aura: Third World criticism in the age of global capitalism,' *Critical Inquiry*, 20(2), 329-56.
- Driver, F. & Yeoh, B.S.A. (eds.) (2000) Special Issue on Constructing the Tropics, *Singapore Journal of Tropical Geography* 21(1).
- Eagleton, T. (1994) 'Goodbye to the Enlightenment', *The Guardian*, 5 May.
- Escobar, A. (1992) 'Imagining a post-development era? Critical thought, development and social movements,' *Social Text*, 31/32, 20-56.

- Escobar, A. (1995) 'Imagining a post-development era', in J. Crush (ed.), *Power of Development*, London: Routledge, 211-27.
- Esteve, G. (1987) 'Regenerating people's space', *Alternatives* 12(1), 125-52.
- Fanon, F. (1986) *Black Skin White Masks*, London: Pluto.
- Ferguson, A. (1998) 'Resisting the veil of privilege: Building bridge identities as an ethico-politics of global feminisms', Special Issue on Border Crossings, Part 2, *Hypatia* 13(3), 95-114.
- Gandhi, L. (1998) *Postcolonial Theory: A Critical Introduction*, Edinburgh: Edinburgh University Press.
- Gibson-Graham, J.K. (1994) "'Stuffed if I know!'" Reflections on post-modern feminist social research', *Gender, Place and Culture*, 1(1), 205-24.
- Gibson-Graham, J.K. (2002) 'Poststructural interventions', in E. Sheppard & T. Barnes (eds.), *A Companion to Economic Geography*, Oxford: Blackwell, 95-110.
- Gregson, N. (1993) "'The initiative"-delimiting or deconstructing social geography?', *Progress in Human Geography*, 17(4), 525.
- Hall, S. (1996) 'What was "the post-colonial"? Thinking at the limit', in I. Chambers & L. Curti (eds.), *The Postcolonial Question: Common Skies, Divided Horizons*, London: Routledge, 242-60.
- Harris, C. (2002) *Making Native Space*, Vancouver: UBC Press.
- Jackson, C. (1997) 'Post-poverty, gender and development?', *Institute of Development Studies (IDS) Bulletin*, 28(3), 145-53.
- Jackson, P. & Jacobs, J. (1996) 'Postcolonialism and the politics of race', *Environment and Planning D: Society and Space*, 14(1), 1-3.
- Jacobs, J.M. (1996) *Edge of Empire: Postcolonialism and the City*, London: Routledge.
- Jacobs, J.M. (2001) 'Touching pasts', *Antipode* 33(4), 730-34.
- Kaplan, C. (1998) 'Resisting autobiography: Out-law genres and transnational feminist subjects', in S. Smith & J. Watson (eds.), *Women, Autobiography, Theory: A Reader*, London and Madison: University of Wisconsin Press, 208-16.
- Katz, C. (1995) 'Major/minor: Theory, nature, politics', *Annals of the Association of American Geographers*, 85(1), 164-68.
- Klor de Alva, J. (1992) 'Colonialism and postcolonialism as (Latin) American mirages', *Colonial Latin American Review*, 1(1-2), 3-23.
- Kusno, A. (2000) *Behind the Postcolonial*, London: Routledge.
- Lester, A. (2003) 'Colonial and postcolonial geographers', *Journal of Historical Geography*, 29(2), forthcoming.
- Lipstz, G. (1997) *Dangerous Crossroads: Popular Music, Postmodernism and the Poetics of Place*, London, Berso.
- Loomba, A. (1998) *Colonialism/ Postcolonialism*, London: Routledge.
- Loomba, A. & Kaul, S. (1994) 'Location, culture, postcoloniality', *Oxford Literary Review*, 16, 3-30.
- Marcus, G.E. (2000) 'The twistings and turnings of geography and anthropology in winds of millennial transition', in I. Cook, D. Crouch, S. Naylor & J. Ryan (eds.), *Cultural Turns/Geographical Turns: Perspectives on Cultural Geography*, London: Prentice Hall, 13-25.
- McClintock, A. (1992), 'The angel of progress: Pitfalls of the term "postcolonialism"', *Social Text* 31/32, 84-98.
- McClintock, A. (1995) *Imperial Leather: Race, Gender and Sexuality in the Colonial Contest*, New York: Routledge.
- McEwan, C. (1998) 'Cutting power lines within the palace? Countering paternity and eurocentrism in the "geographical tradition"', *Transactions, Institute of British Geographers*, 23(3), 371-84.
- McEwan, C. (2002) 'Postcolonialism', in V. Desai & R. Potter (eds.), *The Companion to Development Studies*, London: Arnold, 127-31.
- Mehta, U.S. (1999) *Liberalism and Empire*, Chicago: University of Chicago Press.
- Miyoshi, M. (1997) 'Sites of resistance in the global economy', in K. Ansell-Pearson, B. Parry & J. Squires (eds.), *Cultural Reading of Imperialism: Edward Said and the Gravity of History*, London: Lawrence and Wishart, 49-87.
- Miyoshi, M. & Harootunian, H. (eds.) (2002) *Learning Places: The Afterlives of Area Studies*, Durham: Duke University Press.
- Nash, C. (2002) 'Cultural geography: Postcolonial cultural geographies', *Progress in Human Geography*, 26(2), 219-30.
- Ngugi wa Thiong'o (1986) *Decolonising the Mind: The Politics of language in African Literature*, London: James Curry.
- Norris, C. (1993) *The Truth about Postmodernism*, Oxford: Blackwell.
- Ong, A. (1999) *Flexible Citizenship: The Cultural Logics of Transnationality*, Durham: Duke University Press.

- Parry, B. (2002) 'Directions and dead ends in postcolonial studies', In D.T. Goldberg & A. Quayson (eds.), *Relocating Postcolonialism*, Oxford: Blackwell, 66-81.
- Perrons, D. (1999) 'Reintegrating production and consumption, or why political economy still matters', in R. Munck & D. O'Hearn (eds.), *Critical Development Theory*, London: Zed, 91-112.
- Philo, C. (2000) 'More words, more worlds: Reflections on the "cultural turn" and human geography', in I. Cook, D. Crouch, S. Naylor & J. Ryan (eds.), *Cultural Turns/ Geographical Turns: Perspectives on Cultural Geography*, London: Prentice Hall, 26-53.
- Pratt, G. (1999) 'From registered nurse to registered nanny: Discursive geographies of Filipina domestic workers in Vancouver, B.C.', *Economic Geography*, 75(3), 215-36.
- Quayson, A. (2000) *Postcolonialism: Theory, Practice or Process?* Cambridge: Polity.
- Quayson, A. & Goldberg, D.T. (2002) 'Introduction: Scale and sensibility', in D.T. Goldberg & Quayson, A. (eds.), *Relocating Postcolonialism*, Oxford: Blackwell, xi-xxii.
- Radcliffe, S. (1999) 'Re-thinking development', in P. Cloke, P. Crang & M. Goodwin (eds.), *Introducing Human Geographies*, London: Arnold, 84-91.
- Rajan, R.S. (1993) *Real and Imagined Women-Gender, Culture and Postcolonialism*, London: Routledge
- Rattansi, A. (1997) 'Postcolonialism and its discontents', *Economy and Society*, 26(4), 480-500.
- Rorty, R. (1998) *Achieving our Country Leftist Thought in Twentieth Century America*, Cambridge, MA: Harvard University Press
- Rose, J. (1987) 'The state of the subject (II). The institution of feminism', *Critical Inquiry*, 29 (4), 9-15.
- Rothman, H & Davis, M (1999) *The Gut Beneath the Glitter: Tales from the Real Las Vegas*, Berkeley: University of California Press.
- Said, E. (1978) *Orientalism*, London: Routledge.
- Said, E (1993) *Culture and Imperialism*, London: Chatto and Windus
- Said, E. (1999) *Out of Place*, London: Granta
- San Juan, E. (1998) *Beyond Postcolonial Theory*, London: Palgrave
- Sayer, A (2001) 'For a critical cultural political economy', *Antipode*, 33(4), 687-708
- Sharma, A. (1996) 'Sounds oriental: The impossibility of theorizing Asian musical cultures', in S Sharma, J. Hutnyk & A. Sharma (eds), *Dis-Orienting Rhythms The Politics of the New Asian Dance Music*, London: Zed, 10-28
- Sherman, R & Voss, K. (2000) 'Immigration and unionization in the San Francisco hotel industry', in R Milkman (ed.). *Organizing Immigrants The Challenge for Unions in Contemporary California*, Ithaca: Cornell University Press.
- Slater, D (1998) 'Post-colonial questions for global times' *Review of International Political Economy*, 5(4), 647-78.
- Spivak, G. C. (1985) 'Subaltern studies: Deconstructing historiography', in R Guha (ed), *Subaltern Studies IV*, New Delhi: Oxford University Press, 330-63.
- Spivak, G. C. (1987) *In Other Worlds: Essays in Cultural Politics*. London: Methuen.
- Spivak, G. C. (1990) *The Postcolonial Critic: Interviews, Strategies, Dialogue*. London: Routledge
- Spivak, G. C. (1993) *Outside in the Teaching Machine*, London: Routledge.
- Spivak, G. C. (1999) *A Critique of Postcolonial Reason*, Cambridge, Mass · Harvard University Press.
- Spivak, G. C. (2002) 'Resident Alien', In D.T Goldberg & A Quayson (eds), *Relocating Postcolonialism*, Oxford: Blackwell, 47-65
- Stoler, A (1995), *Race and the Education of Desire Foucault's History of Sexuality and the Colonial Order of Things*, Durham: Duke University Press
- Storper, M. (2001) 'The poverty of radical theory today From the false promises of Marxism to the mirage of the cultural turn'. *International Journal of Urban and Regional Research*, 25(1), 155-79.
- Vizenor, G (2001) *Fugitive Poses*, Lincoln: University of Nebraska Press.
- Watts, M. (1995) '"A New Deal in Emotions" Theory and practice and the crisis of development', in J Crush (ed.), *Power of Development*, London: Routledge, 44-62.
- Yeoh, B. S. A. (2001) 'Postcolonial cities', *Progress in Human Geography*, 25(3), 456-68
- Yeoh, B. S. A. & Wilks, K. (1999) '"Heart" and "wing", nation and diaspora: Gendered discourses in Singapore's regionalisation process', *Gender, Place and Culture*, 6(4), 355-72
- Young, R. (1991) *White Mythologies: Writing History and the West*, London: Routledge
- Young, R. (2001) *Postcolonialism: An Historical Introduction*, Oxford: Blackwell.

注 参考文献はそのまま記した。よって印刷中となっているものや、それぞれの邦訳は各自で確認して欲しい。